

アメリカ (サンフランシスコ) (ロサンゼルス) 7日間の研修

海外研修も今年で4回目、研修地をアメリカ西海岸へと変え、11月1日から7日間の日程で実施されました。

今回の研修は、「ワイン農場視察」「資源有効利用の取り組み」「大型スーパー、日本との違い」と、3か所が計画されていました。

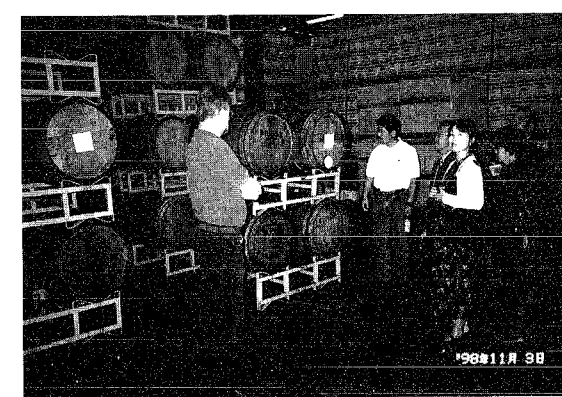
日本の数倍の国土を持つアメリカ大陸・国内時差がニューヨークと3時間、日本とは7時間あり、11月1日午後3時過ぎに成田を出発した我々が、サンフランシスコに到着したのは、同じ1日の朝7時30分となるため、なんとも奇妙な感覚でした。

サンフランシスコは、1500年代スペイン船が発見され、イギリス人が初めて上陸した

地、その為町並みはヨーロッパを思わせる風情がありました。又、この地は「7つの丘の町」と呼ばれるだけあり坂道が多いことに驚かされました。ベルを鳴らしながら走るケープルカーは印象的です。我々の訪れた前日10月31日はハロウインで、道路や住宅のあちこちにかぼちゃの置かれたいる風景を見ることも出来ました。

サンフランシスコ2日目。ワイン農場の視察が行われました。

サンフランシスコは雨季と乾季がはっきりしていて、年間の平均雨量は475㎖。ナパはブドウの収穫まで雨が降らないことより、実に痛みがこないこと。水のコントロールが人工的に出来ることで良質のブドウが取れるそうです。車中から見える広大な畑の中に大きなプロペラがあり、これは冷気を払う働きがあります。又、ナパでとれたブドウの汁の70%以上を使用したもののみがナパワインと名乗ることが出来、少ないものはカリフォルニアワインと総称されるそうです。車中で事前学習をしながら約1時間半。アメリカワインの90%を生産するカリフォルニア。この中でも特に優れたワイン産地として知られるナパバレーに到着しました。ナ



パバレーには250ものワイナリーがあります。我々が訪問したルイス・マターニの初代は、イタリアのジェノワでワイン作りをしていたが、1000年前前にこの地に移り1933年にワイナリーを開き、現在で3代目。家族で経営する最も古いワイナリーでした。当日は、ワイン蔵・ボトリング工場等を見学しながら説明してくださいました。カリフォルニアでワイン作りが始められたのは1780年頃。ナパバレーで本格的にワイン作りが始められたのは約80年後のこと。その後急速に成長したナパバレーのワイナリーも1870年代害虫により大打撃を受けたそうです。そして、192

0年から施行された禁酒法により一部を除く全てが廃業。33年に禁酒法が撤廃された頃には、その名声も失われていたのだそうです。その後、発酵温度を調節する冷却装置を導入し、またフランスからオーク材の樽を大量輸入する等の最新技術と伝統的な方法によって、より上質なワインを作り出すことに成功しました。このワイナリーは、1933年に工場を作り直しましたが、工場内は夏37℃以上になるため天上にファンを取りつけ、温度調節をしていました。また、ナパ・ソロマカウンティ・レイクカウンティに3つのぶどう畑を持ち、最近では酸味が少ないものに常にトラ

イしているそうです。蔵には、2000ガロン(8000ℓ)入るレッドウッドの古いタンクが幾つかありました。これ位大きいと樽ではなく、タンクと呼ぶのだそうです。又、このタンクの使用済の木は、香りが良いことから家具にも使用されるとのことでした。樽はフランス産のホワイトオークを使用しています。ナパではこのワイナリーが最も多

出たガラス片に種々のものを混ぜ色づけしたものを。タイルもガラス片を混ぜて造ったり、手洗いの仕切り壁も金属は使わずリサイクル品のプラスチックを使用してありました。又、カーペット材料の40%もリサイクルで、汚れた部分のみを張り変えることが出来る工夫がされています。その上、この施設がある限りこのカーペットのメンテナンスは保証されているとのことでした。さらに、外壁は発泡スチロール系の木材を利用し熱効率を25%上げ、ガラスの間に特殊ガスを入れ、これも熱効率を良くしていました。照明は自然光を取り入れ、太陽の光を追いかけ吸収する装置により省約出来、照度の調節もセンサーにより逐次増減されていることから、このビルの電気、ガス代は同じ広さの建物の約1/2、2100ドルの節約となっていました。建物周囲の樹木(やしの木)は雨の少ないロスでも最少限の水で育つよう、センサーにより土が乾いた時に散水するよう工夫されていました。屋根や外壁も白が使われていました。が、ロスは日射しが強いので反射効果をねらったことだそうです。ロスは、町の真ん中でも石油の採掘がされています。ここでは掘れば必ず石油が出てくる位、豊富な資源となっています。採掘時に出るガスを処分せず、石油を採掘した後の空洞に

貯めて置き、冬場に使用するという工夫がされています。地下に自然のガスタンクが作られているということ。一方、この建物は企業の消費ネ・デモンストレーション会場にもなっています。各種器機メーカーがデモ用の器機を設置し、利用者はそれぞれの作業でどの機材をどのように使用すると最も省資源で行うことが出来るのかを実際に行って見ることが出来、それが企業の利潤にもなることになっていました。

参加者から、再利用は新しいものを使うより費用がかかるのではないかの問いに、先に説明した様に、この建物はリサイクルにより3億ドルの節約が出来ているとの話がありました。狭い国土の日本では、リサイクルするための再加工する場の確保が困難であるが、アメリカではそのような心配はない様です。エドさんの熱心な説明と参加者からの質問で、予定を30分以上も延長した研修となりました。

1時間、3番目の研修地は、オントリオミルズ、ここは全米最大級のアウトレット・ショッピングモールで店舗数は2000余、それがワンフロアに広がっています。様々な有名ブランド店が集まり、デパートやスポーツ用品店、ペットショップ・美容院等が店を並べ、さらに映画館、ビデオスクリーン等の娯楽施設やBIG・FOODも整っている、1店舗の広さも広く商品も豊富でした。短時間ではその極一部しか見ることが出来ませんが、究極のショッピングが味わえるとも言います。そのような施設を見学し、アメリカの土地の広さを再認識させられるものでした。

翌日、2番目の研修、エナジ・リソースセンターを訪れました。研修室へ通され、ビデオを見ながら概要の説明を受け、センター内の見学をしながら詳細の説明がありました。

この施設は、ガス会社が資源の再利用・有効利用を目的として既存の施設の1/2を1957年に、残りを1993年に改築したものでカルフォルニア唯一のエネルギー資源センターだそうです。何故このような施設が必要なのか、ということですが、大気汚染・有限である資源をこれからのように有効に使ってゆくかを学ぶ機会が必要であり、その為の会場ともなっていました。この建物自体がそのあらわれで、改築時の建材の80%は再利用されたものでした。たとえば、鉄柱の芯に入る鉄棒は凶悪犯罪に使われ没収された拳銃を溶かしたものです。フロントのガラスは6年前のロス大地震で

はフリーウェイを造る時に再利用する等の説明がありました。又毒性があるものは山奥に廃棄する等、広い土地であるから可能な一面も聞くことが出来ました。資源の再利用・大気汚染・有限である資源の有効利用法等について再認識させられる有意義な研修となりました。

以上が今回の研修の概要ですが、この研修は、観光旅行では見聞することの出来ないアメリカをより身近に感じることが出来、日本との違いを肌で感じ、たいへん有意義なものでした。そして、立場や年齢の違いに交流することが出来たことも、この研修があったからであり、この研修の目的が果たされたと思います。又、参加者はこの研修で得たものを地域のリーダーとなり、生かしていただけるものと期待します。最後に、参加者全員が体調を崩すことなく、無事に帰ってこれたことは何よりでした。



▲サンフランシスコの街並み

5日目、東へ約